



米国の大統領選挙は、米国内の「良識派」の予想（あるいは期待）に反して、トランプ候補が勝ってしまいました。多くの人々同様、私も正直、かなりショックを受けました。「地球温暖化などでっち上げ」と言って憚らない氏が大統領になると、パリ協定からの撤退だけでなく、米国での環境問題への取り組みは、大幅に後退すると予想されます。なぜこのような結果になったのか、多くの議論がされていますが、ここでそれらをフォローすることはしません。ただ、今回の結果は、私たちに、国とは何か、どうあるべきか、の問いを、改めて突き付けた気がします。

トランプ氏のいう「偉大なアメリカ」とは、他のどの国よりも豊かで一人勝ちしていたかつての経済大国としての米国の復活のようですが、そこには、「(民主主義国家として)世界をリードするアメリカ」というイメージはありません。あらゆる民族を受け入れて多民族国家として持っていた価値や文化の多様性も捨て、白人を中心とした社会の復活も目指しているようです。多くの”poor white”たちが最大のサポーターであることを意識した彼の「偉大な国」とは、メキシコ国境に長大な壁を築いて、”colored”の移民の流入を阻止するという発想に典型的に表現されています。彼らの祖先が大西洋を渡って北米大陸に上陸した時、先住民のインディアン達は彼らを受け入れてくれたという歴史を、トランプ氏らはすっかり忘れてしまったようです。

「国」は、私たちが何者かを意識する時の重要な単位にはちがいません。人類学的・民族学的なまとまりに加え、自然や歴史の中で培われた文化あるいは風土も、国としてのアイデンティティに大きく関わっています。国が公平性と多様性の恩恵を受けられる社会を維持している限り、人々にとって経済を活性化し文化的にも豊かになるひとつの重要な契機ともなります。しかし、公平性がなくなり多様性の価値も失われると、独善的・排他的な意識が支配的になり、へたすると戦争へと向かいます。

21世紀に入った現在、急激に拡大した人類活動によって人類全体の生存が依拠している地球の環境そのものが、かなり危うくなっており、地球は「人類世(人新世)(Anthropocene)」に突入したともいわれています。このような状況における地球上のそれぞれの「国」のあり方を、経済や文化のあり方も含めて、今考えるべきです。有限の地球では自分たち(の国)だけが良ければいいという発想は、もはや成り立たないでしょう。ではどうすべきか。もちろん、私たち人類全体の大きな課題ですが、それぞれの国や地域での、限られた自然と資源を有効に公平に生かせるような多様な地域社会づくりを通して、地球社会全体の存続の道を探していくしかないように思います。生物の多様性が生態系全体の安定に不可欠であるといわれていますが、人類においても、公平かつ多様な生き方ができる社会こそが、地球社会の未来可能性には不可欠ではないでしょうか。超大国アメリカは、その公平性と多様性が今、最も問われている国かもしれません。